



文教協会50年を振り返る⑥

戸田公入城350年記念

文教協会事務局



昭和60年は、戸田氏鉄公入城350年記念の年であり、市では様々な記念事業が行われました。文教協会では、「文教のまち大垣」の発行、大垣城とその城郭の復元模型の製作がされました。市では、「奥の細道むすびの地記念館」と「郷土館」が開館されました。

文教設立20周年であった昭和59年と戸田公入城350年であった昭和60年は、大垣市にとって大きな節目の年であったと言えます。

私たちのふるさと「大垣」の歴史・文化のすばらしさを知るよいきっかけになったことと思います。平成24年4月に、新しい「奥の細道むすびの地記念館」がオープンしました。住んでいるから気づかない地域・郷土のよさを、改めて学んでいきたいものです。

文教協会報(昭和60年9月・10月号)から、当時の様子を振り返ってみたいと思います。

奥の細道むすびの地記念館・郷土館の開館によせて

武偃文興

(1) 芭蕉と大垣・そして「興文偃武」

日本文学史上、不朽の名作として名高い「奥の細道」。その長い文学紀行終焉の地をここ大垣とした芭蕉。元禄2年3月、江戸深川の草庵を旅立つとき、芭蕉はすでにこの紀行の旅の疲れをやすめるべく、はるか西美濃大垣の地を想い描いていた。

- ・ 夏草やつわものどもが夢の跡 (奥州平泉)
- ・ 閑かさや岩にしみいる蝉の声 (山形立石寺)
- ・ 五月雨を集めてはやし最上川 (奥州秋田)
- ・ 荒海や佐渡によこたふ天の川 (北陸新潟)
- ・ 石山の石より白し秋の風 (滋賀・大津)
- ・ 蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ (大垣・船町)

中山道赤坂宿を経て、大垣に入った芭蕉は、この地方の多くの文人俳人たちに温かく迎えられ、長旅の疲れを心ゆくまで休めたという。

— 9月3日、大垣に到り、如行の家に旅労れを休める。門弟集まり来て、旅中の無事を喜び合ふ。六日、伊勢の遷宮を拝まふと又舟出する。前後七ヶ月、道程六百里(2300余km)の大旅行であった。

— <日本文学辞典 新潮社版>

船町港から桑名へむけて大垣の地を後にしようとする芭蕉との別離を惜しんで集まった人たちに残したこの句—蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ—には大事業を成し終えた芭蕉の、この地の人々への、熱い想いが込められている。時に正に秋9月。

史蹟「奥の細道」船町港の近く、元水産物市場の跡地に、去る8月7日、総合福祉会館が開館した。その一階に特設された奥の細道むすびの地記念館は、俳聖とうたわれる芭蕉と大垣との、深いつながりとその意義を、みごとに分かりやすく見せてくれる。「芭蕉と大垣」その結びつきを生んだものは何だろう。今さらいうまでもなく、治水を柱とし、興産・興文を藩是とした、戸田藩政によってはぐくまれた経済力のもと、豊かな文化的・文学的風土があったからにはほかならない。

「興文偃武」一文を興し、武を治める一戸田藩政がいかに文教重視の政策を行ってきたかを示すこのことばは、貴重な遺産として今日に引き継がれてきた。

※偃武—いくさ道具をふせ用いぬこと。武備をやめて天下が太平になる。
(塩谷温編改訂新字鑑による)

(2) 大垣の歴史的風土を未来に継ぐ

大垣市の第二次総合計画は「明るく、豊かな、住みよい産業文化都市」として、次のような都市づくりをめざしている。

- 豊かで活気あるまち
- 知性と教養のあふれたまち
- 心のふれあいおうるおいのあるまち

その一環として、戸田公入城350年を記念して今大垣城を間近に望む丸の内2丁目に建設が進められている郷土館（仮称）は、文教都市としての近代的再現をめざした教育の充実（第二次総合計画）をねがう市民にとって、その1日も早い開館が待たれるところである。（10月開館予定）

小学校の児童は今、まず自分の住んでいる地域を知る学習（低学年）から地理歴史の勉強を始める。しかし、その勉強も限られた時間の制約を受け、勉強はかけあしで、日本の地理、日本の歴史へと移ってゆく。

地域の連帯、地域の特性の失われようとしている今こそ、もっと、自分が生まれ育ってきた「ふるさと」を知り、みつけ、学ぶ教育が大切なのではないか。「地域を子どものふるさとに」（文教協会報8月号市長に聞く—大垣の教育に期待する—）ということの意義を、戸田公入城350年、郷土館（仮称）開設のこの機会に、真剣に考えてみたいものである。

文部省も、すでにこのことを、次期教育課程の指導要領改訂の重要な柱としてとりあげ、小学校での地理歴史教育を、「地域を学ぶ」ことを重視する方向で検討されていると聞く。

「地域を子どものふるさと」にするためには、小学校での学習・勉強で「地域を知り、学ぶ」ことが重視されなければならないのは当然であるが、忘れてはならぬのは「遊び」である。

子どもの学習は、「遊び」から始まる。地域の中、子どもたちは「遊びながら、遊ぶことによって地域を知り、地域に学ぶ」のである。

それぞれの地域が、そして大垣が、子どもたちにとって、よりよい「遊び場」であり、「知り、みつけ、学ぶ」ことのできる、「心のふるさと」であるよう願ってやまない。

<文責 文教協会報編集委員会>

<水門側詩情>

・水美わしき秋九月
「奥の細道」たどり来て
ここ大垣に憩ひたる
翁と慕ふ諸人に
残しし俳句は時を経て
今、文教の名も高き
街の象徴と刻みたり

・水門川の船どまり
別離にぬれる袂衣
旅の想いとそのままに
写して白き雲の影
翁の夢ははてしなく
ただひたすらに求めゆく
俳句の道こそ愛しけれ

—昭和46年10月19日、岐阜県小中学校音楽教育研究大会大垣大会において、市内各中学校生徒合唱クラブによる合同合唱曲として発表—

戸田公歴代藩主

*何人読めるでしょう。

- ①氏鉄・・・うじかね
- ②氏信・・・うじのぶ
- ③氏西・・・うじあき
- ④氏定・・・うじさだ
- ⑤氏長・・・うじなが
- ⑥氏英・・・うじひで
- ⑦氏教・・・うじのり
- ⑧氏庸・・・うじつね
- ⑨氏正・・・うじただ
- ⑩氏彬・・・うじあきら
- ⑪氏共・・・うじたか